

在特会の論理（3）

——「鬱憤晴らしじゃつづかない」C氏の場合——

樋口 直人

1. 問題の所在——なぜ「在日特権」にこだわるのか

在日特権を許さない市民の会の目標は、「在日特権を日本から無くすこと」であるという¹。なぜ「在日特権」にそれほど固執するのか、なぜ標的が「在日」になるのか、これが筆者の基本的な関心である。この問いの背景には、ゼノフォビアを国際比較の観点からみれば、在日コリアンはむしろ排斥の標的になりにくい集団であるという現実がある。すなわち、排外主義運動の「先進国」たる欧米で排斥の対象となるのは、必ずしも移民一般ではなく、特定の集団に集中している。それらの集団は、おおむね次の2点を根拠とする敵意を向けられてきた。第1に、社会の底辺にあって福祉国家の「お荷物」になるか、底辺にあるがゆえに貪欲に「仕事を奪う」という経済的理由がある。第2は、犯罪や環境悪化の原因という治安維持上の理由である。

しかし、在日コリアンの場合にはこうした理由が当てはまらない。学歴をみると、大卒比率は日本人よりやや低く、失業率も日本人より一定程度高いと思われる（移住連貧困ネットワーク 2011；大曲ほか 2011）。だが、社会の底辺に固定化されているという状況とは程遠い²。就職差別が現実問題として存在したものの、在日コリアンは自営業として成功した「企業家移民」——米国におけるアジア系のような「モデル・マイノリティ」として国際的には位置づけられるだろう。治安維持上の理由についても、犯罪発生率が高いといった「材料」はない。その意味で、他の国からみれば在日コリアンが圧倒的な排斥の対象となる現実は、かなり奇異に映ると思われる。

そうであるがゆえに、「在日特権」といわれ指弾されるものも、非難の根拠を無理に探しているという性格が強い。在特会のホームページでは、特別永住資格や生活保護、年金、公務就任、参政権で「在日がいかに

無体な要求をしているか」が指弾されている。しかしこれは、定住外国人に対して「先進国」として要求される処遇水準の「相場」をまったく理解していない主張である。外国人参政権ひとつとっても、参政権の有無よりむしろ「移民の政治統合」という観点からアプローチする研究上の常識に対して無知である。国籍の生地主義と重国籍、外国人参政権という政治統合の制度のうち、いずれも整備していない「先進国」は日本だけであり、政治統合上の国際基準を満たしていない。そうした体系的な思考を欠くが故に、「在日特権」という現実を矮小化する言葉に固執するのだともいえる。在特会が要求するような処遇を、特別永住者その他の外国人に対して講じた時、日本は政治的自由主義国家としての要件を満たしていないとみなされ、国際的地位は低下するだろう。それは「国益」に反することになるはずだが、「在日特権」を指弾する議論はそうした見方をまったく欠いている。

ただし、筆者はこれを非合理的な病理現象として片付けるつもりはない。なぜ「在日」に関しては合理的な論拠に基づく判断力を失い、「在日特権」をことさらに作り上げて排斥に邁進するのか。マクロ的には東アジアの地政学的問題が大きく影を落としていると考えるが、それについては別稿で議論したい。ミクロには、活動家の政治的社会化の過程をみることから、なぜ「在日」が問題として浮上したのかを明らかにしたい。そうした関心を持って、C氏（30代男性）に対して2011年5月22日に聞き取りを実施した。

2. 政治への関心、外国人との接触

（政治への関心は）高校生のときから持っていた感じですね。高校生のときに自衛隊のPKOのああいふ派遣のところから、ずっと関心を。で、もともとはいわゆる保守系の思想ではなかったんですよ。いわゆる、天皇陛下に対する考え方も違ってたんですよ。ずっとそれが根っこにあって。

（PKOは）カンボジアの派遣のとき。あの時に、いろいろ左側が盛り上がってたんですよ。正直いって。自衛隊はいらないとか、自衛隊はなくせとか、今でも

¹ 同会ホームページより、2011年9月28日閲覧（<http://www.zaitokukai.info/modules/about/zai/speech.html>）。

² 中国籍の大卒比率は日本人よりかなり高いが、そうした在日本中国人に対しても在特会は敵意を向けている。そのことからしても、欧米的な移民排斥とはまったく異なる論理が働いていることがわかるだろう。

やってますけど。自分ももともとそういうような目で見ていて、自衛隊っていうのはやっぱりいらないうんだけ。これだけみんなに迷惑掛けて、先の戦争でも迷惑かけて、また日本は行って何かやるのかって。軍隊なんか派遣してどうするんだけ。

自分も PKO 反対の署名活動にちょっと名前書いたり、やってたんですよ。活動には参加しなかったですけど、名前書く程度でやってましたけど。その時にはやっぱり自民党がね、当時の政権与党を嫌ってたんです。どちらかというとな社会党的な、社民党的な立場、社会党的な主張です。まったく自衛隊いない、憲法守れ、九条守れて。まったくの九条論者でしたね。

(選挙には) 欠かさず行ってますね。当初は、僕が選挙権を持ったときは民主党(が投票先)でした。民主党ですね。やはり民主党でなければダメだろう。まあ自民党はダメだから、民主党が勝ってこの国が変わるのなら民主党に入れよう、というような感じでしたね。うちの親とかには「民主党いいんじゃないかい」。全然政策とかはまったくわからないままで、民主党に1票入れたら、民主党に入れたら自民党も落ちるからいいんでないか。では民主党に入れてみようや、って入れていった。〇〇さん(民主党議員)が強いじゃないですか。〇〇さんが何かやってくれるんじゃないか。地元の選挙区じゃないですか。〇〇さんという大看板があるから、強いですよ。だから皆、民主党に期待している。

自分が保守系のほうに変わってから、やっぱり自民党(が投票先)ですね。(郵政選挙の時には?)あの頃るときには民主党です。迷ってました。そこから変わっていったんですよ。たちあがれ日本という新党ができた時には、たちあがれ日本ですね。小選挙区はないですから比例ですね。小選挙区は自民党、できればたちあがれ日本というかたちです。

(外国人とは) もともとそんな接するような場面がなかったですね。職場でも学校でもないです。

3. 歴史観の転換

《コミュニティ FM との邂逅》

ある時に、FM 局でラジオ番組がやってたんです。コミュニティ FM です。車で配達しながら聞いたものですから、普段はほとんど AM なんですけどね。自分はテレビよりもラジオなんですよ。テレビはあまり見ないんです。ラジオなんですよ。何しながらでも聞けるじゃないですか。テレビだと画面見なきゃいけない、ラジオってのはいろいろな作業しながら聞けるんで。そういうのは慣れちゃっているんですよ。だ

から家にテレビあるけど、テレビつけっぱなし。ただにぎやかしてつけているだけです。

(その FM を) ずっと聴いてたら、日本、いわゆるあちら側がいう太平洋戦争に対しての見方がちょっと自分とは違って、これは何なんだろうな、ということずっと調べて…。(その FM は) 保守系の立場です、どちらかというとな左からも意見来るんだけど、意見とかいろいろ戦わせていたんですよ。FM 番組、その人のそういう話をいろいろね、再放送でいろいろして、そうじゃないんだぞってというようなことをずっと訴えていたんですよ。戦争とか国の歴史とかそういう話を取り上げて。自分はそれをみながら仕事もやってましたんで、時々しか聴けなかったんですよ。だからいろいろその、聴けることはネットで詳しく検索するなり自分で勉強して、知識を頭に植え付けて。

ああそうなのか、こういう見方もあるのか。左の人たちが言っている、日本は侵略戦争して他の国にいっぱい迷惑をかけて、だから日本はずっと償っていかなくちゃならん。そういう考え方からちょっとずれてみたら、また違った真実の歴史っていうのが見えてきた。歴史っていうのは勝ったほうが変わっていくものだから。僕たちは負けたけど、伝わっていることって文書で残らない口で伝わっていることってのはあります。

祖母が生きてましてね。祖母にもいろいろな話を聞いたんですよ。出征のときの話とか、アメリカから空襲を受けた話だとか。それでも悪いことしたって言わないんですよ。「お国のために」っていう。皆そんな風に思っている。お国のために戦って、みんな私の同級生も近所の人もお国のために死んでいった、というんですよ。やっぱり祖母の話も大きいですよ。

聞いたんですよ。ばあちゃんどうだったんだい、昔のことを思い出させるけど。淡々と話してくれましたね。祖父が軍隊にいて写真も見せてくれたんですよ。馬に、白馬に乗って日本刀をこう差して、凛々しいんですよ。親戚も海軍にいて、海軍にいた親戚の写真ってのも見せてくれたんです。で、その人も死んだ。だけど、全然そんなこの国が悪いことしたなんて思っていないよ、と言ってましたね。5、6年くらい前の話かな。ちょうど亡くなる前だからね。僕が在特会に入りたい前なんです。

《ネットでの情報収集》

その当時はインターネットをやり始めてた頃なんです。インターネットでいろいろ検索してみたら、テレビでやっていることと実際に起きたことが違うんだな、というのがわかった。どこでどう違うかといった

ら、侵略戦争というものではなくて、日本の国の自存自衛のために、いわゆる東亜の解放ってのが、そういうような目的でアジアを守るところから始めていった戦争だったのがわかってきて。

社会人になってからのころですね。20代半ばです。20代半ばになってわかってきて。テレビの見方、終戦記念の日でテレビとかでよく特集をやるじゃないですか。そういうのをちょっと疑いの目でちょっと見てた、疑いの目で見ようになったんです。で、これは何かちょっと違うぞというので、またいろいろ調べていって、その向こうさん、あちらの人が言うには侵略戦争して日本は悪いことした、だから日本はずっと反省すべきでずっと謝っておくべきだ、という風なことをテレビ番組でもジャーナリストといわれる人たちも、そういう主張を繰り返してきて。それに乗っかって洗脳されてるっていうかね、そういう人たちも、自分もその1人だったし。

そこから抜け出して、インターネットでいろいろ調べていって、そういう文章とかも、東条総理大臣が言っていた開戦の詔勅とかもあるし、国を守るために戦った人たち、いわゆる英霊と呼ばれる人たちがいた。それは日本人だけじゃなくて、台湾人でも朝鮮人でも日本を守るためにがんばって戦ってきた人たちがいる、というのがあって。

うちにパソコンがなかったので、ネットカフェ行っ見てたんですよ。ネットカフェに何時間もいて、動画見せて。そういう感じかな。動画いろいろ。6時間なら6時間、9時間なら9時間、3時間バックとかあるじゃないですか。そういうので動画とか見てたんです。パソコンも後で買って、ネットでつないで動画を段々見るようになってきて。『ゴーマニズム宣言』などは) 全然読んでないですね。マンガ読まないです、全然。本も、まあ好きな本は読みますけどね、そんなにあんまり読まないですね。

4. ネットからリアルへ

《護国神社での邂逅》

そこでまあ、(保守系の運動に) 出会って——一昨年の8月に出会ったんですよ。まあ何かやっているかな、というのでいったら××でやってたんですよ。そこで会って、ちょこちょこ話して、ちょこちょこ顔出すようになったんです。△△さん(と会ったの)が最初です。ブログやっているんですよ、△△さん。本当に僕たちの最初の、△△さんはずっとやっているからわかると思うけど、在特会の活動は最初は本当に小さな活動から始めて、△△さんはそれよりもずっと長く活動やってるんで。

8月15日に何かやっていないかなと思って検索かけていったのです。そうしたら(△△さんのブログが) ヒットしたんですよ。〇〇のところやる、じゃあ見に行きたいなって見に行っ、そこで出会ったんですよ。それが最初ですね。リアルで会ったのは。それまで全く1人でやってて。1人でやっててという言い方も変ですけど、1人で見てて。キーボードカチャカチャやっいて。書き込みはしないですね。ただ見るだけ。

(護国神社での集会に行くのは) やっぱりためらいましたよ。二の足踏んでました。だけど本当にあの時に、本当に行かなきゃいかんって何かの衝動に駆られて行ったんです。それまでは全然、「行ってもねえ」っていう。行かなきゃダメだって駆られたんじゃないんですかね。行動しなきゃやっぱり変わらん、ていう。いつまでもネットでカチャカチャやっているような状態じゃねえんだって。行動で示してかないと変わっていかない、という思いになったんです。そういうようなものじゃないですか、っていう感じで行ったのが最初です。何か行かなきゃ変わらん、動かなきゃ何も変わらないっていう。自分も動かなきゃ変わらないし、周りも動いていかなければ変わらないって。でも動いて変わるもんでもないですけどね、今思えばね。

それまでは護国神社がどこにあるかもわからなかったですね。どこにあるんだろう、って。全然わからなかったですね。こんなところがあるのかっていう感じでしたね、最初。初めて護国神社に行っ、その日の午後です。神社のお参りの仕方なんかもわからないんです。その当時はやっぱり。鳥居のくぐり方一つでも、お参りの仕方でもわからなかった。本当に情けなかったですね、あの当時。

あの時はねえ、ただお参りできてよかったっていうだけです。本当に。その気持ち一点だけでした。これで自分もね、きちっとお参りすることができたって。亡くなられた人たちに「ありがとう、国のために戦ってくださいありがとう」ってその気持ちだけでした。本当にその気持ち一点だけです。その当時は心が落ち着くとかそんなのもなかったです。本当に行けて良かったっていう、それだけですね。ただその気持ちだけで感動してましたね。

(2009年8月の総選挙との関連は) それもありましたね。あの時に、紙を広げてたんですよ。参加された人たちが。鳩山さんも靖国神社へ、麻生さんも靖国神社へって。その後も選挙戦ってのがやっぱりあるから。自分もそこには行かなきゃならんだろうな、って。意識がその時に、それまでとは違った、ネットでいろいろ見っていたテレビの報道の仕方とかをね、テ

レビの報道の仕方とネットで見る情報のあり方が全然違った。何か行かなきゃならんと思ったのかな。あの時は。本当、7月まで別に行かなくてもという感じだった。行く気もなかった。

何か行かなきゃならんだろう、やっぱりいろいろ調べて行って、いやー頭に来るなというのもあったしね。麻生さんとかバーで飲んでたのが、それをやたらとね、テレビが揚げ足とって報道する。一本1万円だか何万円だかするバーでワインだけ飲んでたって。そういういろいろな話、テレビでもいろいろして。自民党というか麻生内閣のイメージダウンを狙ってやっているんです。それが一番あれかな。僕はそんなに麻生内閣は支持してないんだけど。麻生さんはどっちかという保守系の思想の人だから、それでやっぱり靖国神社にも行くとか行かないとか、あの時行ってましたよね。それで結局行かなかったけど。靖国神社にも行ってもらわなきゃならんだろうなって。テレビの報道の仕方とネットの情報の流し方の違いかな。知ってもらいたいってそういう、8月のある日にそう思った。

やっぱり印象操作ですよ。ネットでもそうじゃないんだってね、テレビはもうワイドショーとか本当に麻生さんのことでボロクソに言ってるし。本当にあの時はテレビ全体が自民党叩きをやってた、片やネットで見てみるとそうでもない。麻生さんは日本のために一生懸命がんばってる、だからここで自民党を…いやあのとき民主党のいろいろ政策とか選挙戦には書かれないマニフェストの政策をずっと流し続けたんです。ネットの世界では。外国人参政権だとか、その当時の人権擁護法案とか、あと沖縄ステイ計画とかそういうの流してた。

これはやべえなって。民主党に勝たせたらやべえよなっていうので、自分も何か行きてえな、って8月の頃から考えていて。何か宣伝の一つにでもなればいいなって。あの時の街宣は、本当にただ英霊を守るとか英霊に感謝するためだけじゃなくてね、いろいろなプラカードを持っている人もいますよ、実際に。外国人参政権、民主党に政権をとらせてはならんとか。いろいろなそういう趣旨のプラカードを掲げた人もいます。行って良かったと思いますね。

《活動家へ》

(それから) △△さんとほとんど一緒に参加して、活動に参加して。在特会の活動とかも——△△さんも会員ですからね——来てくれて、僕も行って。「お前気持悪いな」っていわれるくらい、「気持悪いな」っていわれるんだけど顔出すって。毎回来るからお前

気持悪いって。お前なんで来るんだよ、ブログ見て来ましたっていったら、ああそうかって。そこで在特会というのも初めて知って、いろいろ動画を見てると在日特権の——私たちの会の根本ていうのは入管特例法の廃止というのが最終目的ですから——枝葉が一杯あるそういう風な特権をちょっとずつでもなくして、それを街宣でもってみんなにわかってもらおう。

(△△さんの活動に参加し始めた時点で在特会の会員には) なってないです。なってないです。ちょっと事情がありましてね。全く個人的な事情³で、入るのはしばらくやめましようって。実際に会員になったのは去年の1月です。会員になるうっていうのは。それまではなる気はなかった。動画を見てもなる気はなかった。組織的には、最初に組織に入らないでずっとやっていこうかなと思った、まったくフリーの立場でいようかと思った。支部が新しくなるんで入らないか、というのがきっかけです。支部が刷新されるってのをきっかけにして、自分も会員になるうって。 (在特会メンバーとの接触は) 会員になる前からありましたんで、「どうだい、入らないかい」といわれても、いやちょっとってまだためらっていた時期がありますね。本当に、そのとき刷新されるからどうだい、って誘いですかね。で、いろいろお話してなったというのが始まりですね。会員としての。

〇〇には在日というのはあまりないんだけど、××とかあいうところに行けば、あの在日の人たちが役所に押しかけていろいろヤクザ使って恐喝まがいのことをやっているというような話を、動画でもってちらちら聞いて。ネットでもいろいろな交流サイトとかあるから、そういうの(を)使って話、いろいろ会話とかして、いろいろ事実を並べてくれる人もいるんで、そういう人たちとコミュニケーションをとっているうち、在特会というのに入って。で、自分なんかちょっとでも役に立てればいいな、というので入らせていただきました。

《ネットとリアルの違い》

結構ギャップありますね。その時に動画で見ていた人と別な顔が——面白くもあるけども、ちょっと自分とは違うなって。それでも、いいギャップですけどね。全然、「がっくし」っていうギャップじゃないんですよ。いつも考えているんですよ。「いつも思考しなさい」って言われるんです。「毎日思考しなさい」って。自分も思考してるんですけどね、思考の仕方がね、足りないってうか。まだ全然できてない。動画では

³ 具体的に何を指すのかは話してくれなかった。

言われたい、言わないんです。実際会うとそういう風に毎日思考しなさい、街宣終わった後でも。お前は毎日思考しろって言うんです。それがやっぱり、実際会ってよかったことです。

5. 歴史修正主義と排外主義

《なぜ歴史修正主義が排外主義に転じるのか》

それは何ていったらいいのかな。ネットでいろいろと検索かけていくんですよ。で、戦争の話は戦争の話。全然違いますよ。で、動画を見て Youtube で動画があって、戦争の動画に付随する動画ってあるじゃないですか。関係動画。そこで在特会の動画があったんですよ。そこで在特会の動画をクリックしたのが最初ですね。外国人に参政権を与える——あの時に東京の小平で創価学会に行って、小平の学会の会館のところでぐるぐる回った。その後東京の信濃町の学会本部まで行って、公明党が進めている外国人参政権を許さん、なんでやらなきゃならんのだって。動画を見たのが最初で、本当の初期の動画です。それからずっと在特会の動画を見て。

いろいろネットで調べてたら、外国人参政権ってのにぶつかって、外国人参政権というのを調べていったら、いわゆる特定の外国人に参政権を——地方のね——参政権を与えようじゃないか。で、これ何なんだろうな、自分で調べていった。憲法でも国民の——日本国民が持っている固有の権利ですよ。その固有の権利を外国人に与えてしまえば、私たち日本国民の意見が取り入れられづらくなる、聞き入れられづらくなる。外国人、今主張しているのは在日韓国人の人、朝鮮人の人、いわゆるシナ人と呼ばれる人、その人たちが外国人参政権を求めている。それに乗っかっている議員もいる。その国会議員がいるっていうので、それは間違っている。

日本国民の固有の権利である選挙権をなんで外国人に与えなきゃならんのだ。憲法でも謳っている通り、日本国民固有の権利ですよ。そこを履き違えて外国人に参政権を与えたらね、移民という形でどあーっと入ってきて、参政権をよこせとか言ってくる人も出てくるし。現に外国人参政権じゃなくて住民基本条例という形に名を変えて、意見とか行政のほうで募集している、おかしいじゃないか。そういう人たちがいる、って僕たちは外国人参政権に反対という立場でデモ行進とか、街宣とかいろいろしていますね。

《外国人ではなく特権を求める輩と戦う》

〇〇(C氏の地元) っていうのは在日の人少ししかいないんですけど、そんなにデモとか街宣とかしても、

ほとんどないよね、全然ないよね、攻撃とかね。××(他地域)は激しいけど、〇〇はないんですよ。民団とか総連の事務所はあります。そこに行ってもね、この間——今年か——民団のあそこ行ってやってきたけど。保育所があそこあって、うるさいっていう。そういうのもあるんですよ。さすがに総連のところはちょっと申請をできないんですよ、(許可が)下りないんですよ。静穏条例というのもあって下りなかったんですよ。だから、道路——2km 弱歩いて、朝鮮学校のそばでデモやったというのがあります。その時にいろいろなんか書かれてましたけどね。ツイッターでもいろいろなんか書かれてましたけどね。在特会が朝鮮学校に来て騒いだとかね。朝鮮学校の前に在特会が来てどうのこうのとかね。ないことばかり書いていたんです。

(コリアンと中国人を比べると) どちらもどっちとえばそれまでだけどな。はるかに、だけど、シナ人の方が怖いですよ。あれだけ人口持っていればね、簡単にできますよ。あいつらはやっぱり人口が大きいし、何よりも共産党主導で動いているのは大きいですね。共産党の命令一下でどんなことでもしてくるから。お世話になった人たちを平気で殺したりね、金とか奪ったりね、平気でやる。倫理観がないんですよ。シナ人には。道徳観とかね。倫理観がまったくない。留学生でも平気でお世話になった日本人を、そういう人たちを平気で殺してね、金品とか奪って逃げるし。片やですよ、チャイナタウンとか池袋にできつつあるようですけどね。自分達のチャイニーズマフィアとか、そういうのも作ってやっているって。そこでまた本国から呼び寄せて、いろんな悪いことをする。組織的に言ったら在日朝鮮人よりもシナ人のほうがはるかに怖いです。僕の考えですけどね。

僕らは在日の朝鮮人とかシナ人とかっていうのでやるんじゃなくて、特権を求める輩には断固として反対する、断固として戦う。国の根幹を揺るがすやつらは、それを支援している人たちとか。

今はやっぱり外国人問題もそうだけど、やっぱり人権侵害救済法っていうのは人権擁護法案っていうのが、次回の国会に提出されるってのはね、これもやっぱり外国人をね、日本人を差別する、外国人が思い通りにこの国を牛耳ろうとしているやつらがいる。外国人に対する憎しみじゃないんですよ。それを動かそうとする国会議員に対する憎しみですね。外国人に対する差別意識っていうのはないんですよ。それを動かそうとする国会議員ですね。そちらのほうにどちらかといえば怒りが高いですね。あと地方議員もそうだし。この地元もそうだし。

それを進めようとする不逞の輩も本当に頭にくるけど、この国を動かしているのはやっぱり議員だし。それを陰で牛耳っているやつらがいるってのはわかるんだけど、それを具体化していくのは議員じゃないですか。地方議員だったり国会議員だったり、そういう人たちに対する反感は強いですね。外国人よりも。そこで金を、利権をむさぼろうとする奴らがね。そういう奴らに対する怒りってのは高いですね。

外国人は基本的に進めていくだけですからね。実際に動かすのは議員ですからね。議員だったり市長だったり行政だったりするわけじゃないですか。それに対する怒りってのは高いですね。よく在特会は差別主義者だとかヘイトスピーチでどうのこうのといいますがね、あれを差別っていうんだったらいわゆる左の人たちがやっているようなことっていうのはね、正しく差別じゃねえかって。九条を守りましょうっていういながら、片やでね、人を殺してるんですよ、いろいろと。過去にもやってきてる。自分達の仲間を叩いてやっているやつらが、一番の差別じゃねえか。

片やで先日テレビでもあった「ハガネの女」の話も、フィリピン人に対する、フィリピンはこんなにひどい国だとか、フィリピンという国ではなくて仮想の国ですけどね、その国はすごいひどい国で毎日ゴミを食べて生活しているとかね、そういうようなことをテレビで言って、それをテレビで流して、それに対してあいつらが何も言わないんですよ。一番そういう国を差別しているのは正しくあいつらじゃないか。僕たちのやっていることは何だかんだいわれるけど、決して間違っていることをやってきていない。その裏返しでもって会員数がどんどんどんどん伸びて、1万人を超えましたし、実際カルデロン問題でやったときに会員数がくっつと伸びたんですね。やっぱり多くの人たちがそれに対して共感を得た、大きかったですよ。

6. 活動の実際

《活動を支えるもの》

鬱憤晴らしじゃ続かないですよ。鬱憤晴らしだったら続かないっす。やっぱり怒りです。そういうことをやる人たちに対する怒り。もっとわかってもらえない日本国民に対する怒りもあります。国が崩れようとしている時に、のほほんとして自分のことだけ考えてりゃいいやっていう、そういう時代じゃない。平和ボケっていわれる人たちがね、何とか気づいてほしい、国の根幹が崩れようとしている時に、自分のことだけ考えて、私利私欲という言い方もヘンだけど、そういうようなものに溺れていくというのはね。自分さえよければいい、それはちょっと違うじゃないかな、そうい

う感じですね。

街宣とかですかね。やっぱり街宣もそうだしデモもそうだし、一から組み立ててみんなと話して一から組み立てていかなきゃならんという立場になって、いろいろとみんな意見を出すんです。それが大変だな。書類1つ作るにしても、自分もやったことがありますけど大変なんです。道路使用許可、自分は□□で1回やったんですけど、自分が出していったときに仕事の合間縫って警察署まで行って出して、また帰ってきて仕事して、また申請がおりたときに□□まで取りに行くという形で。大変だけど面白いですよ。自分の企画でできるんですよ。

サイトにも載せなきゃいけないんで、その文章も自分で考えなきゃいけないんですよ。それも全部考えて。ところどころ添削してもらって。サイトにのっけてもらって。文章をひねるのは好きですね。書くのは苦手ですね。頭の中で考える文章は好きですね。

《得られたもの》

出会いが得られたってのは良かったですね。こうやってやってきて、どんどんどんどん参加者が増えていって、その中でも来てみようかなという人もいるし、本当に来ましてっていう、動画をみて来ましてっていう方もいる。そういう出会いがどんどんどんどん広がっていくってのは、自分の得られたもの。いつも動画で見ますとか、そういう話もちよこちょこちょこちょこ聞きます。実際に街宣の場所に来て。初めて来ました、という。そういう出会いを得られるというのは、同志が増えてきたというのは自分としてやってよかったですよ。1年弱で本当に人は増えてます。やっぱり良かったことです。

僕みたいなネットで検索して見に来ましてっていう人も実際います。組織を改善したから云々じゃなくて、ネットで見てキーボードで叩くのではなくて、実際に自分の足で来てくれる。それが一番やっぱり嬉しいですね。来てくれるってだけで嬉しいです。

(実際に活動した手応え) 周りの人の反応、歩いている人たちの反応。去年も何十回ってやって、誰も聞いてくれないとは思うけどやらなきゃならん。そこでやっていると、年配の人だとか若い人だとか、頑張ってくれよと言ってくれるんですよ。本当に小さな小さな活動なんですけどね。頑張ってくれよとか、励ましてくれる人たちがちょっとずつでも増えてきている、会に関係なく。そういう趣旨にある程度共感してくれる人たちが、少しずつ増えてきている。声にならない声、やっぱり大きいですね。実際ありますからね、現場に行くと。中には反対とか意見いうヘンなオヤジ

もいますけど、酔っ払ってくるとかね。多くの人たちはある程度、民主党のトロさ加減をみて気づいている人多いと思いますけどね。時事問題とか話すと結構食いついてきます。

根本的にあるのは、この国の根幹はやはり代々125代続いてきた天皇陛下を頂点とする国でなければならぬ、と。そのためには憲法といわれるものを廃止して、明治憲法、大日本帝国憲法に戻すのであれば、日本人が作った憲法ですから、そこにもう1回戻って日本人の腐りきった心というのを立ち直る、という言い方もヘンだけどそれに見合った日本人らしさというものをもう1回取り戻してあげたい、という感じで頑張ってます。そんなところです。

7. 結語に代えて

C氏の場合も、B氏と同じく在特会に接近する端緒となったのは歴史修正主義であった。しかもC氏は、それ以前は民主党に投票しており、PKOにも批判的な立場だったという。それが「天皇陛下を頂点とする国」を目指すまでに変化するわけで、そうした「国の根幹」を揺るがす存在に対する怒りが活動を支えていることになる。歴史修正主義から出発したのであれば、こうした復古的な理想の国家像にたどり着く方が、論理的には一貫しているだろう。こうした氏の変化は、在特会のなかでも典型的なものとはいえないが、それは最初に「リアル」で出会ったのが民族派の影響を受けた右翼だったことによる。C氏が最初に行動に踏み出したのは、在特会のデモや集会ではなく8月15日の護国神社であり、そうした場で政治的社会化が進んだと考えられる。

「鬱憤ばらしじゃ続かないっす」というC氏の言明には、自らの活動が義憤にもとづくものであるという思いが込められている。あるべき日本から逸脱させようとする勢力がこの世には多すぎる——民主党だけでなくそれを応援するマスコミ等も含めて。だが、C氏がそこから排外主義へと行き着く論理は明確ではない。在特会は、歴史修正主義ではなく排外主義を前面に掲げた団体であり、なぜそこへの参加があるべき日本にたどりつくための「小さな活動」となるのか。まず、C氏自身がネット世論のなかで盛り上がった外国人参政権に危機感を抱いたことが第一にある。ネットを介して、C氏のなかで「日本を壊そうとする行為」の代表が外国人参政権であり、在日特権であるという認知が形成されていく。

現実問題として、在日コリアンの存在が日本に深刻な脅威を与えると考えるのは社会全体の仕組みを理解できていない証左と考えるより他はない。が、ネッ

トの中にある「真実」は現実世界の真実とはかなりずれており、それがドンキホーテのように空想上の敵を見出すことへと結びつく。C氏がパソコンを自宅で使うようになる前に、ネットカフェで何時間も検索して情報収集していたのは、そうした状況の象徴ともいえる。インターネットが極右や排外主義にとっての動員構造になっているのは、何も日本だけではないが、これについては稿を改めて論じたい。

文献

移住連貧困プロジェクト編, 2011, 『日本で暮らす移住者の貧困』現代人文社.

大曲由起子・高谷幸・鍛冶致・稲葉奈々子・樋口直人, 2011, 「在日外国人の仕事——2000年国勢調査データの分析から」『茨城大学地域総合研究所年報』44: 27-42.

(付記)本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。